

多様化するニーズに応じて事業を展開

固定概念にとらわれず常に進化

千葉県松戸市に本社を構える旭運輸株式会社は、親会社である旭倉庫株式会社の物流を担う会社としてスタート。平成30年12月に創業50年を迎えたが、いわゆる「物流子会社」の枠にとらわれない独自の発展を続けている。



親会社の旭倉庫敷地内に本社を構える旭運輸は、ブルーのイメージカラーのトラック

「物流子会社」という立場から脱却し、独り立ち図る。

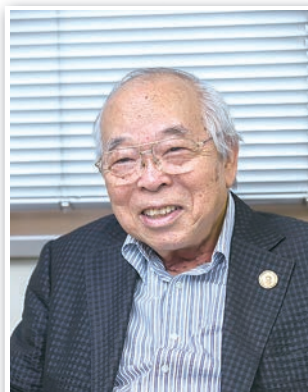
旭運輸株式会社（中村浩代表取締役）は、昭和43年12月、旭倉庫株式会社（本社：東京都中央区、渡辺貫治社長）が保管する貨物の輸送を目的に、純粹な「物流子会社」として設立された。親会社である旭倉庫も大正7年の創業という100年超の歴史を持つ老舗企業で、薬品や化学品の保管を中心としていた。現在も旭運輸の株式は、旭倉庫が約半数を持ち、株保有率等の関係性は設立当初とほぼ変わらないが、同社が親会社の貨物輸送を専門に担うという関係性は薄れている。貨物輸送量について設立当初の親会社依存率は100%だったが、現在はほぼゼロだという。

「創業当初は、旭倉庫の貨物を専門で運んでいましたが、現在では親会社に頼ることなく、危険物第4類関係（化粧品・クリームの原料など）、木材（一般家庭用木造建築）、クロム酸を浄化する装置の輸送および交換作業、印刷機部品の保守・点検・交換作業、企業単位契約の引越業務、機密文書保管など、多岐にわたる業務を行っています。これらの輸送業務は、すべてのお客さまと弊社との直接取引の業務です。また、ある種特殊で専門的な業務が多く、他社でも急に始めることのできる仕事や、一般雑貨や大量消費・輸送できるような貨物の輸送は得意としていません」（中村浩代表取締役）

保有車両は20台、小型から大型まで業務にあわせて多様な車種を保有。危険物輸送や引越業務には大・中型ウイングバン、木材輸送には平ボディ、クロム酸浄化装置輸送にはユニック車などバリエーション

が豊富であるが、それぞれの台数がほぼ均等にあり、車種にあまり偏りが無い。ドライバーの仕事はほぼ専従性で、危険物取扱主任、玉掛け、移動式クレーン、フォークリフト操作などの各種免許・資格の保有率も高いことから仕事の専門性も高く、各自一つの業務を継続することでさらに熟練度は上がる。

「私は、昭和35年に大学卒業、旭倉庫に入社。倉庫畑で育ってきた後に運輸へと転向しました。倉庫の貨物は、その時代や経済状況を背景に形状や重量を刻々と変化させてきました。倉庫畑で荷物を見続けてきたことを経験として、『時代の変革とともに新しい荷物への対応が必要である』との考えを持ちました。運輸へと籍を移してから、刻々と変わる経済構造の変化とそれに対応する物流の姿をみることで、親会社に依存しない新たな顧客開拓の必要性を強く感じました。また、変化する荷姿に敏感に対応できるように多品種で多様な業務に対応できる車を用意しました。現在20台ある車種の内訳は、大きく5分類で、それも用途に応じて分けています」（同）



中村 浩 代表取締役社長



袋姿の貨物は現在はパレット積でフォークリフトを使用し荷卸しするが以前は人の手で行われていた。



ドラム缶の荷姿の貨物も輸送が可能



クロム酸の浄化槽はユニック車で運ばれる

より特殊・専門性の高い業務で他社との差別化を図り、少数精鋭でさらに経験豊富な人材を武器にしている同社。この武器こそが高品質で生産性の高い仕事に繋がり、適正な運賃・料金収受を可能にしているという。

この武器を育て、強化するために同社ではどのように対応してきたのか。これに関して中村社長は、平成3年から毎月1回発行する社内報を1人で作るのと同時に、作業手順書などを書面化して社内に展開している。「小規模の企業であるからこそ社長や管理者の思いや方針が確実に伝わるし社員はそれを常識にしてもらいたい。コミュニケーションはとても大事」(同)という。

「特殊で多岐にわたる業務を行い、専門性の高い仕事だからこそ、ドライバーの質を向上させることと、ドライバーの働きやすい環境が必要です。例えば、ドライバーがお客様に納品するために、工場等で順番を早くしたいがために早出をして並んでいるようなことではいけません。順番待ちは公平なようで不公平。遠くから来る車が不利なのは明らかです。経営・管理者はドライバーのそのような不公平な取引関係を見直し、働きやすい環境を整える必要があります。また、現在人材不足が深刻化していますが、もし人材が確保できなかつたら現有的人材、計画の範囲内で無理しないで仕事をするべきです。背伸びをして無理するとどこかで破綻し、その結果として事故や

トラブルが増えて利益が下がってしまいます。特徴を持ち、そしてそれを保つためには車の数を減らすことも一つの選択肢といえるでしょう」(同)

同社の方針通り、現在は休んでいるような車はない。利益の出ない「動くだけの仕事は商売ではない」(同)というポリシーからだ。

中村社長は、「求めているのは単純な売上ではなく、利益であり、利益は車やドライバーの数が増えたりすることで単純に増えるものではない」と指摘する。さらに、「経営者が前を向いて社員に対していい方向を示さないと会社は伸びないと断言できます。自分たちで顧客を開拓し、そうした顧客にも長い付き合いを続けていただいていますし、取引条件や運賃・料金についてもスムーズに交渉いただいています。ドライバーにいい給料を払うために経営者はいい方向を向かないといけません。いわゆるドライバーは『最後の営業マン』と言われる。すべての製品のアンカーであることをドライバーが理解して配達に行かないとお客様に感謝されません。並び順を競うような取引関係から脱皮しないといけません。物流、経済の構造が変わってきたことに対応し運賃・料金をどうやって上げていくのか、また、どうやって自分で荷物を獲得していくのか、激しい時代の流れの中で中小企業が生き残っていくには、自社の強みを持ち、お客様との強い絆を結んでいくことが何よりも肝要だと思えます」(同)

ホットにゆーす

野球が繋ぐ人の縁

中村社長は、滋賀県立八幡商業高校から明治大学へと進学し、高校、大学を通じて野球部で選手として活躍。大学卒業後は、高校、大学ともにOB会役員として人と人をつなぐ役割を続けてきた。近年では、母校である八幡商出身の則本昂大投手（東北楽天イーグルス）と、明治大学出身で当時の楽天の星野仙一監督とも交流され、ドラフト2位で指名を受けた則本投手を、星野監督から「先輩任せて下さい。」との言葉を聞き出し、星野監督はその新人を開幕投手として起用し、見事勝利をおさめた。その後OB会で星野監督と会った時、中村社長に固い握手を求めたという。その後の、則本投手の活躍は誰もが知るところだろう。常に人と人との橋渡しに尽力してきた中村社長の人柄は顧客にも愛され、事業の発展にも役立っている。中村社長は「いい言葉は、人を動かし人を成長させる」と語っている。



八幡商業高校野球部の監督室で則本投手（右）と記念撮影

企業プロフィール

旭運輸株式会社

代表取締役 中村 浩

千葉県松戸市南花島向町312番地

従業員 24人（ドライバー20人）

台数 22台